

## 公的住宅建替に際し住民の個人的記憶を計画に生かす手法の研究

—住民の記憶の索引を収集する計画手法の検討—

主査 荒川千恵子\*<sup>1</sup>

委員 三沢 浩\*<sup>2</sup>, 新井 啓一\*<sup>3</sup>, 三浦 史郎\*<sup>4</sup>, 渡辺 政利\*<sup>5</sup>, 新井 英明\*<sup>6</sup>

本研究は公的集合住宅の建替時に、居住環境の連続性を確保するため、居住者から各人の「エピソード記憶」を聴き、建替計画に生かす手法の提案である。ふるさとに等しい住み慣れた団地に、彼らが喜んで戻れる計画手法がないからである。そこで4団地を対象に調査を行い、「生活用語」を手掛かりにして記憶を引き出し、かつ自由記述で暮らしの状況をみた。加えて住まいの「空間用語」を使い、空間の良し悪しを聴いた。結果として、今までの計画では普遍性がないうとして排除された個人の記憶を、建替時に活用し得ることが分かってきた。この手法は馴染みある団地の再建が期待でき、かつ居住者に計画への参加を広げる可能性も持っている。

キーワード：1)個人的記憶, 2)エピソード記憶, 3)暮らしの記憶, 4)集合住宅建替, 5)住まい計画, 6)空間用語, 7)生活用語, 8)記憶の手掛かり, 9)暮らしの連続性

### STUDY ON A METHOD TO EFFECTIVELY REFLECT RESIDENTS'S PERSONAL MEMORIES IN THE PUBLIC HOUSING RECONSTRUCTION PLAN —Review of a planning method utilizing residents' memory indices—

Ch. Chieko Arakawa

Mem. Hiroshi Misawa, Keiichi Arai, Shiro Miura, Masatoshi Watanabe and Hideaki Arai.

This research proposes an alternative planning method which makes good use of residents' "episodic memory" in the reconstruction of housing complexes thus enabling to secure continuity of living environment because conventional planning method failed to give due respect to residents' attachment to their homes. The survey, conducted at four places, solicits memories, using "words associated with lifestyle" as indices and promotes better understanding of residents' lifestyle. Quality of living environment was examined against "words associated with living space". As a result, personal memories, regarded non-universal in the conventional planning method, were found to be useful. The proposed method contributes to making reconstructed housing complexes resident-friendly and promoting greater resident participation.

#### 1. 研究の目的と概要

この研究は簡単にいうと、集合住宅団地の建替に際して、そこに永く住み続けてきた一人ひとりの居住者から、生活体験の「記憶」を聴くことにより、暮らしの連続性を大切に作る計画手法を提案することが目的である。建設当初から30数年を過ぎた公的賃貸集合住宅団地は、住民にとって既に新たな「ふるさと」である。その建替にあたり、居住者が戻り入居を望み、喜んでふるさとに戻れるかは疑問である。新生した団地が新しい機能と効率を満たすだけでなく、その場所にあった古い記憶を呼び戻す手掛かりを、計画に生かす手法を求めたいと考える。個人の住宅を設計する時、建築家は建主の注文を受け、

条件を具体化するために要求を聴く。加えて建主やその家族の記憶の中にある習慣、経験、希望をも聴くのが普通である。しかしコーポラティブ・ハウスを除くと、集合住宅の設計では、入居者の意見や経験を聴くことは一般的にはない。特に公的賃貸住宅においては、不特定多数のための計画がなされてきた。様々な家族像や、所得階層によって異なる住まいの要求や、意識に対応すべく行われたのが、これまでの集合住宅の「型計画」であった。結果として、入居者は既製品に合わせた住まい方を強いられる。このような計画手法は、建替計画でも踏襲され、永く住み続けてきた住民の意見や要求が入れられることは少なかった。

\*<sup>1</sup>茨城大学教育学部 教授  
\*<sup>4</sup>(株)象地域設計

\*<sup>2</sup>(株)三沢建築研究所 主宰  
\*<sup>5</sup>(株)象地域設計

\*<sup>3</sup>生活建築研究所  
\*<sup>6</sup>よろず住まいの相談

そこで同じ団地に永く住んできた人びとの「個人的記憶（エピソード記憶 episodic memory）」を収集し、そこにあらわれた暮らしをとりまく状況について、空間をあらわす言葉を知ることができれば、暮らしの連続性を配慮した計画手法があり得ると考えた。

このエピソード記憶について、精神科医の中井久夫は次のようにいう。「エピソード記憶つまりその人限りの個人的記憶は……人格を形成し持続する上で不可欠である。……エピソード記憶の索引となるいろいろなものを遠ざけたり捨てさせる家族や老人施設は痴呆を促進していることになる。一般に老人は転居とともに膨大な索引を失う」<sup>21)</sup>

ここでエピソード記憶とは「出来事記憶」ともいわれ、個人の記憶の中で時間や場所、周辺状況とを結びつけて再生できる、一般的には思い出のことでもある。これに対して歴史や数値など知識としての記憶は、「意味記憶 semantic memory」として区別される<sup>22)</sup>。

永年住み続けてきた人たちのいる団地の建替計画の進め方は、居住者の経験や生活の知恵を聴き取るところから進めたい。彼らが育て、つくってきた、住まいと団地の環境に関する「記憶」を土台にして、住まいづくりと環境づくりの方法を築き上げる必要があると考える。

## 2. 方法と経過

### 2.1 研究方法と問題点

日本住宅公団は1955年に設置され、1997年までに賃貸・分譲住宅を合わせて103万戸新規供給した。その一方で1978年以降、昭和30年代に建設した賃貸住宅16万戸の建替を開始した。そのうち首都圏域で1997年までに、10団地を建替えた。しかし事業における公団の姿勢や、建替後の高家賃化から、建替対象団地で反対運動が起きたり、裁判に至った例もある<sup>23)</sup>。

建替の理由は住宅団地の「老朽化の進行」であり「社会的陳腐化」にあると、事業者自身のべている。

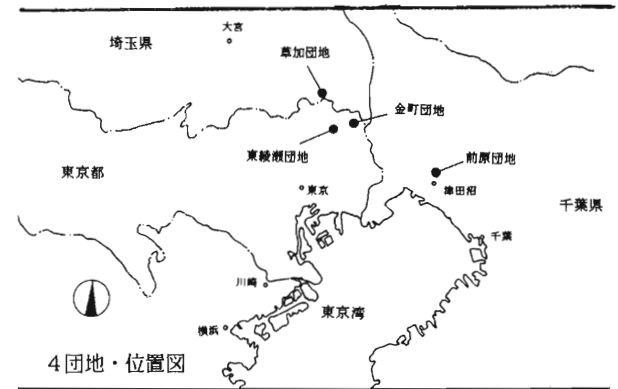
研究対象は協力の得られた東京東部及び周辺の建替対象団地である草加、金町、前原、東綾瀬の4団地にしばった。概要は、図2-1と表2-1に示したが、同一縮尺図で見る時、その込み合い具合の開きには驚く。何れも35年以上を経過した団地であり、当初から住み続けている居住者がいる。その永い年月に社会は激しく変化し、人びとの暮らしも変遷している。その間に毎日の暮らしの中で何気なく見過ごし、忘れていたことを振り返り、楽しかった、辛かったことを思い返すところから調査が始められた。

第1段階としては、生活と空間に対する記憶を喚起する手掛かりとしてのアンケートを行い、かつそれによってエピソード記憶の聴取（ヒアリング）対象者を選ぶ。

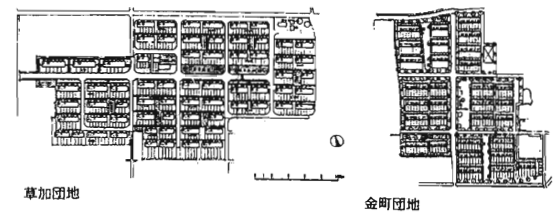
第2段階では、これまでの住まいと環境についてエピソード記憶を聴取する。

第3段階では、収集した結果をまとめ、今後の計画手法に役立たせ得るかを考察し、普遍性と現実性のあり方を検討する。

ここで必要なことは、聴取したそれぞれのエピソード記憶の中の暮らしの延長上に、将来の計画の条件を整理

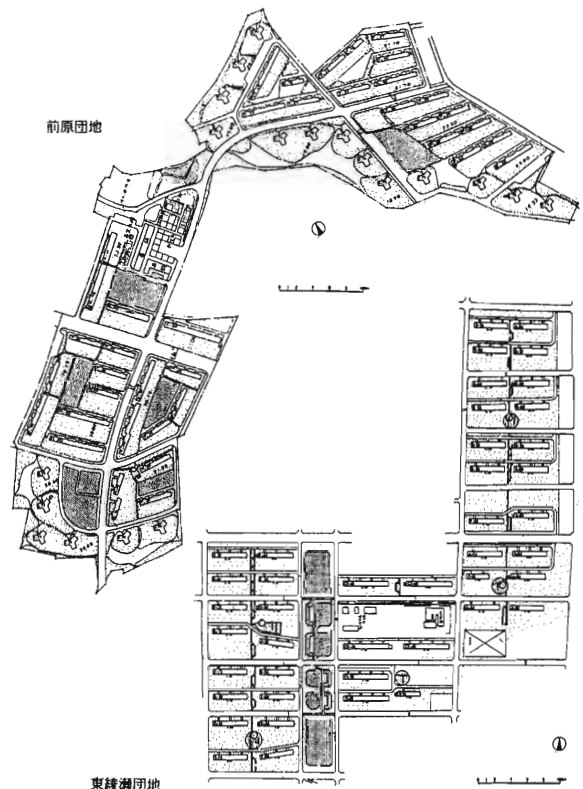


4団地・位置図



草加団地

金町団地



東綾瀬団地

4団地・配置図 同一縮尺

図2-1 4団地 位置図・配置図

表2-1 調査対象団地概要と調査数

概要				
団地名	草 加	金 町	前 原	東綾瀬
所在地	草加市中央	葛飾区東金町	船橋市前原町	足立区東綾瀬
最寄駅	東武線草加	常磐線金町	総武線津田沼	千代田線綾瀬
	徒歩7分	徒歩15分	徒歩15分	徒歩20分
建築年	昭和33年	昭和33年	昭和35年	昭和39年
棟 数	68棟	32棟	59棟	43棟
住 棟	テラスハウス	テラスハウス	中層 4~5階建	中層 4~5階建
戸 数	410戸	226戸	1,428戸	1,096戸
現居住者	125戸	89戸		1,080戸
住宅型	1寝室 36戸 2寝室 175 3寝室 172 4寝室 27	2寝室 154戸 3寝室 72	1寝室 192戸 2寝室 936 3寝室 285 施設付 15	2寝室 808戸 3寝室 288
現家賃	4.9~7万円	5.8~6万円		4.5~5.3万円
建替状況	建替進行中 2ブロック 裁判中	建替準備中 一部残し 協定書交換	建替進行中 1ブロック	建替対象
アンケート男女				
配布票数・票	90	50	60	50
回収票数・票	64	26	31	35
回収率・%	71.0	52.0	51.7	70.0
有効数・件	62	26	31	35
ヒアリング数	19	3	3	6

して居住者に示すことである。すなわち居住者の共有の記憶の手掛かりが、将来の住まいの計画条件として扱われることになる。

注意すべきことは「意味記憶」の計画に戻されてしまうことである。武蔵野緑町団地の例を引くが、この建替計画では事業者と居住者間で熱心な話し合いがあり、居住者の意見が計画に反映された。貴重な樹木、景観、生活空間の保存が求められ、一部は実現した。しかしその経過の中で、各居住者の個人的記憶は十分に反映されたとはいえない。また、建替による高層化も、今までの「型計画」の論理の中で行われ、その検証もなかった。

別の事例でいうと、建替にあたって事業者は間取り、家賃制度の説明には時間をかけ、入居予定者との話し合いを心掛けているが、計画条件の設定では、むしろ入居予定者の「意味記憶」に手掛かりを求めているに過ぎない。例えば老朽度、設備の便利さ、遮音・断熱・気密などの性能、耐震性能、土地の有効利用などがそれである。

また建替による高層化が入居予定者に受け入れられるのは、近代性・合理性という言葉と結びついていると考えられる。人びとの体験したことのない高層化は、情報社会の「意味記憶」による表層的なもので、人の心に働きかけたものではない。このような「意味記憶」による計画の進め方は、既存計画を基本的に踏襲するものとなり、建替えられた新しい集合住宅は、程度の差こそあれ同様な課題を引き継いでいる。

このような問題意識のもとにここで重視しているのは、エピソード記憶を聴くことによって、時間と場所に結びついた、個人の生活史の位置づけを知ることである。そ

して暮らしの中で獲得した空間体験を、建替計画に反映させ、再構築の機会とする可能性につなげるのである。ただしプライバシーの侵害や建替事業の利害関係などを、常に考えながら進めなければならない。

## 2.2 研究の経過

先にのべた4団地では、主に自治会長の協力のもとに、戸別訪問あるいは自治会により、アンケート用紙の配布・回収が行われた(表2-1)。団地により回収率に差が見られたが、ヒアリングに応じた人数は予定を超えた。これらのアンケートの結果を数理的に処理しグラフ化する方法よりも、サンプルをビジュアルに示し、分析することにした。

第1段階のアンケートでは、まず調査対象団地4団地において、生活に関する事柄について、楽しかったこと、辛かったことを5段階選択で回答を得、加えて自由記述によって、具体的な暮らしの状況を求めた。同時にそれらの内容からヒアリングに応ずる人を探し得た。

また、これからの住まい方の可能性を考える材料を得るために、将来の住まいにこうあったら良い、または不安と思うことを聴き出すアンケートを、上記4団地中、前原、東綾瀬2団地で行った。将来住む空間について聴くことは、進行中の建替事業への影響があると考え調査に憚りを感じたので、未だ建替計画が具体化していない団地と、反対に既に軌道に乗っている団地とを選んだのである。

第2段階として、アンケートでヒアリングに応じた人にエピソード記憶を求めた。その内容を検討することによって、暮らしの傾向と実態、その人の個性と特徴のある記憶の内容を知ることができた。

第3段階として、自由記述とヒアリングのまとめの分析によって、記憶の中にある暮らしの生活の用語の中から、空間の用語として使い得る計画の用語を引き出すことを試みた。

第4段階では、暮らしの特徴を示す言葉の断片を取り出し、計画の条件にまとめ、それらを計画の用語として活かす方向性を考察した。

## 3. 調査内容

### 3.1 アンケートに求めるもの

このアンケートの目的は前述したように、戸建住宅計画と同じ方法によって、これまでの居住者の永年の住まいの経験を問い、これからの建替計画の基礎資料とするものである。アンケートは大きくは2つの質問を用意し、第1は生活の諸側面に関する質問であり、第2は空間に関する質問である。

## 1) 生活に関するアンケート

まず、フェイスシートで入居時期と当時の家族数、団地内転居時期、家族最多の時期、現在家族数を聴き、家族の変遷を思い出す契機に役立てようとした。

質問項目としては、これまでの生活に関する用語26項目を用意した。これらの印象を、楽しかったこと(+2)から、辛かったこと(-2)まで、5段階選択で回答を求めた(表3-1)。

上記の生活諸側面の設問から、自由連想による記憶の再現を期待した。ただしこの回答から、計画目標や条件を引き出すためには、回答に込められた意味、事情を吟味することが必要になると思われる。

また楽しかった、辛かったという、体験に伴う感情を聴いた各26項目に、エピソード記憶を聴くための手掛かりとして自由記述欄を設け、暮らしの状況を知る見込みをたてた。その記述欄は狭い割には比較的反応があり、よく書かれていた。

## 2) 空間に関するアンケート

これまでの生活を引き継げる空間をつくるためには、そのような空間の働きについて、居住者と設計者の間で共通認識となる空間デザインの言葉が必要である。そこでそのような言葉をアンケートの中で展開し、「町家」とか「都市住宅」という言葉が、居住者にどう受け止められるかを調査した。

さらに空間に関する設問30項目をつくり、現在住んでいる団地や以前の住まいの経験や、周りの人びとから聴いたことを含め、将来の住まいを考える時、どう考えるのかを、望ましい(+2)から不要(-2)までの5段階選択で回答を求めた(表3-2)。

表3-1 生活用語 6分類26項目

A. 利便性(5項目)	5. 音の環境
1. 通勤(その他仕事の関連)	.....
2. 通学(その他子育ての関連)	D. 住宅(4項目)
3. 買物(市内のお店など)	1. 家の広さ
4. 遊び(家の中や団地の中)	2. 家の間取り
5. 散歩(団地の中や周り)	3. 収納(量, 場所等)
.....	4. 設備(台所・浴室・便所等)
B. 交際(5項目)	.....
1. 家の出入り(戸締まり)	E. 家族と健康(4項目)
2. 近所付き合い	1. 家族の健康
3. 団地の外の交際	2. 家族の変化(子供, 老人等)
4. 地域での役割	3. 家事(主婦その他)
5. ボランティア	4. 家のならわし(祭・食事)
.....	.....
C. 環境(5項目)	F. 暮らし(3項目)
1. 緑の環境	1. 日曜大工
2. 犬猫の環境	2. 趣味・スポーツ
3. 鳥の環境	3. 特徴ある暮らし方
4. その他生物	(合計26項目)

表3-2 空間用語 3分類30項目

A. 住まいの内外に自然を呼び込む空間について	5. ベランダに接する居間
1. 素足の感触を楽しめる床	6. 皆で参加できる台所
2. 木・土・紙の自然材利用	7. 土間・通り庭・中庭
3. 風・光を入れる広い窓	8. 車の危険のない路地
4. 風の流れをつくる窓	9. 戸端集まりの場
5. 冬の日照	10. 木陰やベンチのある空間
6. 生火の暖房(暖炉など)	.....
7. 鳥の鳴声で目覚める寝室	C. 家族一人ひとりがくつろげる場所について
8. 小鳥を呼ぶ水場・植え込み	1. 天井の高い居間
9. 植木・野菜いじりの空地	2. 取り外しできる間仕切り
10. 朝顔やへちまを育てる空地	3. 客用の寝室(孫など)
.....	4. 将来増築できる空間
B. 住まいやその周辺での、近所の方や子供の友達との交流の場所について	5. 複数の浴室・トイレ
1. 広めの出入口	6. 広い窓のある浴室
2. 出入口前の庭	7. 斜め空間を楽しむ屋根裏
3. 縁側と庭先	8. 採光通風のある地下室
4. 出入口に近い居間	9. 夏日を和らげる屋上庭園
	10. 個性と調和のある町並
	(合計30項目)

また、これらの設問の理解を深めるため、京都の町家と町並の図を示し、その特徴を次のように記した上で、そこにおける生活感覚の受け止め方を聴くことにした<sup>1)</sup>。

- (1) 間口が狭く、奥行きが深い敷地で低層・接地型住宅
- (2) 両隣の境は壁・塀で区画され、前と後の二面開放型
- (3) 前は車道に接し、後は中庭・緑道・コモンスペース
- (4) 通り庭の吹抜、前栽は採光・通風の役割を果たし、自立的環境を作る

町家は大勢が集住するために高密度居住となる時、お互いに迷惑をかけない、共同秩序が保たれる都市住宅として生み出された知恵であった。現代社会に望まれる、これからの都市住宅としてこの町家から取り入れたいもの、残したいもの、引き継ぎたいもの、加えて住みにくそうなどころの改善を考える必要がある。従ってこのヒントによってアンケート内容がより具体化することを期待した。

この項目の作成では、項目毎の重複を繰り返しながら、面積や性能、構造などの用語を避けた。それは暮らしの記憶に期待をかけると共に、専門技術用語が本来の限定的内容、意味を超えて働くことを避けるためでもあった。

## 3.2 ヒアリング調査に求めるもの

最初の調査の中で、面接に必ず意向を聴き、幾人かの居住者にヒアリングを実施した。調査者側は質問として-2, +2を回答した項目を聴こうとしたが、むしろ居住者の方が多彩な「エピソード記憶」を展開した。

その結果、団地を中心にした、これまでの住まい方に関わる言葉を収録できた。その集計と分析を通して、同じ団地に永く暮らすことによって得られる、居住者それ

ぞれの多様な暮らし方の個性がみえた。それは団地の暮らしの楽しさや、人生における位置も含めて、暮らしを支えてきた団地内外の生活空間についても、その多様性を確認する作業になった。

#### 4. アンケート調査の結果

##### 4.1 生活アンケートの結果

1) 楽しかった記憶として最も多かった項目は、4団地とも「緑の環境」であり、続いて多いのが団地内や周辺の「散歩」と「近所付き合い」である。

図4-1で全体を概観すると、団地の通勤、通学・子育て、買物、子供の遊びといった「利便性」項目の評価は高く、6～8割はプラス評価であり、次いで鳥や生き物の環境を含んだ「環境」項目や、家の出入り、団地外交流、地域での役割、ボランティアといった「交際」項目にプラス評価が多く、半数を占めている。いずれも永い期間を要するものであり、また永く住み続ける中で育まれる事柄であり、それは良き思い出に繋がっている。

次いで注目されるのは、「家族の健康」のプラス評価であるが、これは自由記述によれば「家族全員元気だった」「特に大病しなかった」といった個人的事情の他に、「緑に多く恵まれて」「澄んだ空気でした」と、団地環境に関する記述がみられたことである。

2) 以上の楽しかった記憶に対して反対に、辛かった記憶の多いのが、住宅に関する項目であり、「家の広さ」「家の間取り」「収納」「設備（台所・浴室・便所）」は、いずれも半数前後がマイナス評価として挙げている。ただし、全戸1室増築したテラスハウスの金町団地は、「家の間取り」が例外的にマイナス評価が少ない。

「家の広さ」について、辛かった（-2）を選択した29人の家族構成の変化をみると、家族数のピークを過ぎて減少しているのが20戸、そのうち単身または夫婦のみになっているのは19戸である。このことから辛かった（-2）の選択は、エピソードとしての過去の記憶を反映しているものであると考えることができる。

また、辛かった（-2）と、どちらかといえば辛かった（-1）の選択の違いをみると、辛かった（-2）を選択した方に、家族数が多く、かつ、より早い入居となっている傾向がみられた。住宅に関する項目のこのマイナスイメージは、昭和30年代に建設された住宅の質の低さを、今にして示していると思われるが、プラス評価も一定数みられ、特に「広さ」や「間取り」では、3割前後が楽しかった、良かったという記憶に繋がっていることに注目したい。

辛かったこととしては、意外であったのが「犬猫」を挙げている人が少なくなかったことである。その理由として考えられるのは、ペットに対する住民の好悪の態度

が分かれていて、それを一律禁止した公団の割り切りが、影響したのではないかということや、建替事業が進んでいる過程で、大量の空家の発生に伴う荒廃によって、飼い主に捨てられたペットが多くなることなどである。

##### 4.2 空間アンケートの結果

図4-2に示した空間に関する設問内容の多くは、日本の伝統的な都市住宅によくみられていた事柄であるので、全体としては、肯定的な回答、すなわち望ましい（+2、+1）が多く、次いでどちらでもない・分からない（0）が多く、不要（-2、-1）とするものは0～2割程度である。

1) そのような中で、最も望ましい率が高かったのは、冬の日照や採光・通風を求める広い窓やその造りで、9割前後を占めている。次いで、「木陰やベンチ」や「車の危険のない路地」「木などの自然材利用」「素足の感触を楽しめる床」などに、7～8割の望ましい率が見られたが、特に建替事業が進んでいる前原団地に（+2）が多く、進行中の建替に対する反応であろうか。

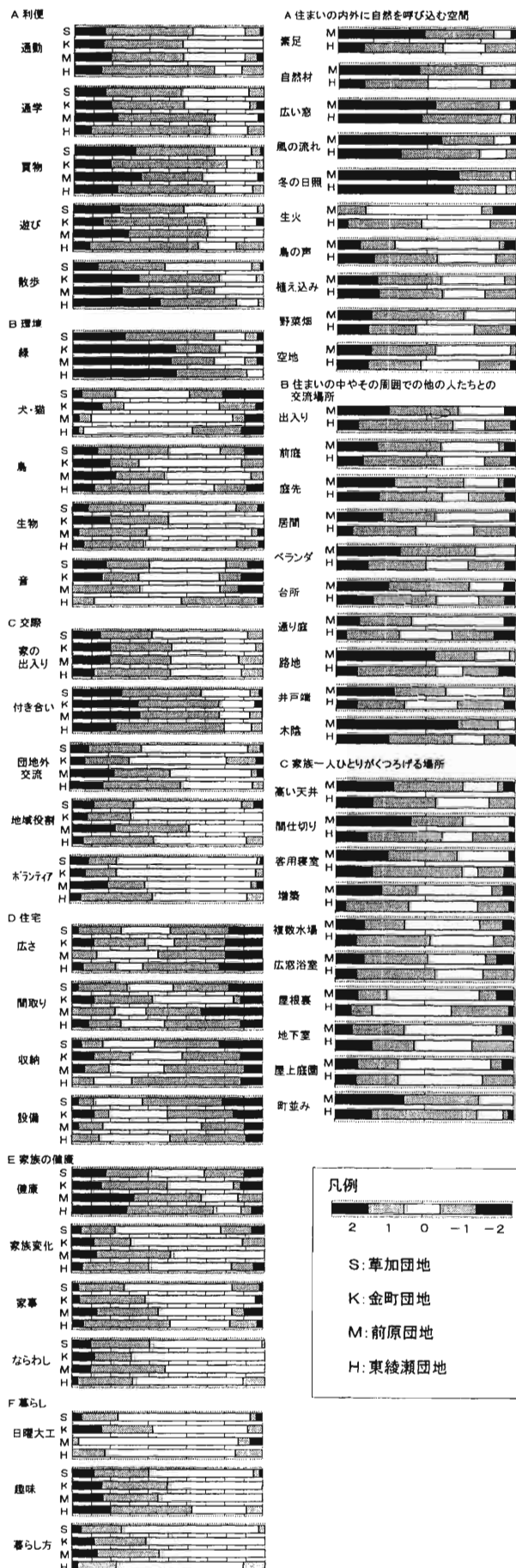
住まいの地域への開放性をイメージした、「広めの出入り口」「出入り口前の庭」「縁側と庭先」「出入り口に近い居間」などは、いずれも望ましい率が高く、6割前後を占めているが、「土間・通り庭・中庭」は不要の回答が多く、「井戸端的集まりの場」もマイナスイメージを持ったのか評価は低い。家の周りの「小鳥を呼ぶ水場・植え込み」「植木・野菜いじりの空地」や、狭い空間でも生かそうとする「朝顔やヘチマを育てる空地」では、半数が望ましい率を占めているが、暖炉等の「生火の暖房」はどちらでもない・分からないの回答率が多い。

2) 住空間に関する項目は、古くからの空間デザインの他に比較的新しい空間の有様も含めていて、「天井の高い居間」や「取り外しのできる間仕切り」、孫などが来た時の「客用の寝室」に望ましい回答率が高くなっているが、その他はどちらでもない、分からないの回答が多い。

30項目の中ではやや異質な内容である「個性と調和のある町並」は、日照や採光・通風と並んで9割近く望ましい率が高く、近年の町並景観への関心と、団地住まいをしてきた経験が、そのような結果を示しているのだろうか。

3) 2団地間に一定の傾向がみられ、殆どの項目において建替事業が進行中の、前原団地の方に望ましい率が多い。進行中の高層化による建替とは、異なる空間へ傾斜した反応であることに注目したい。

図4-1 生活用語アンケート 図4-2 空間用語アンケート



### 4.3 生活と住空間に関する事項との関連

ここでは回答者毎に、26項目にわたって聞いた生活に関する楽しかったこと (+2) から、辛かったこと (-2) までの数値を合計したものと、前節の30項目の空間に関する、要 (+2)・不要 (-2) の数値の合計を算出し、生活に関する結果を横軸に、住空間に関する結果を、縦軸に採ったグラフにプロットしてその相関をみた (図4-3)。

その結果は、まず生活の諸側面に関する項目のトータルでマイナス、すなわち辛かったとなるのは1割で、9割は楽しかったという肯定的な反応である。また空間に関する項目も、8~9割がプラス、すなわちこれからの都市住宅で望ましいことと考える範囲にある。

その両者の関連をみると、相関係数Rは0.4025で、ややばらつきが大きいけれども、これまでの生活を楽しかったと受け止めている肯定的な人ほど、これからの住まいに対する要求やイメージを、豊かに持ち得ているといえそうである。

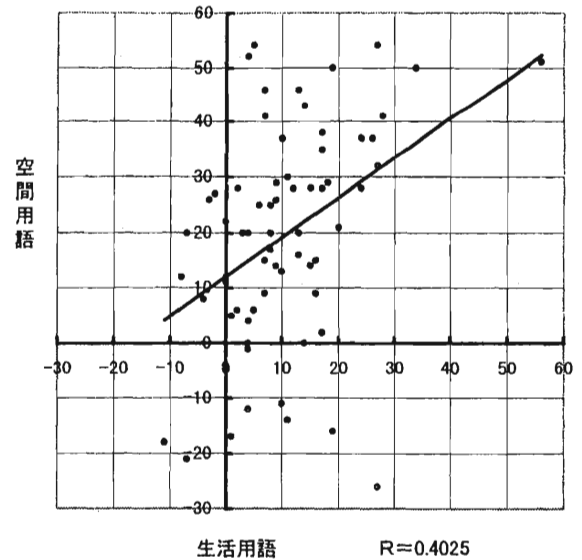


図4-3 生活と住空間の関連

## 5. 自由記述について

### 5.1 自由記述の内容

自由記述欄に書かれていた件数を、生活用語のアンケートで行った6分類に従って、団地別に示すと次のようになる。

#### 自由記述の件数

	計	草加	金町	前原	東綾瀬
票数	156	64	26	31	35
記述者数	113	54	14	20	25
利便性	139	62	14	37	26
環境	168	82	26	29	31
交際	115	57	16	22	20
住宅	144	64	18	35	27
家族と健康	85	43	9	14	19
暮らし	48	20	5	10	13
件数 計	699	328	88	147	136

### 5.2 自由記述にみる暮らし

アンケートの自由記述欄に示された、エピソード記憶の一つひとつは断片的であるが、それらを通した時に、その記述がなされた背景にある事情がみえる。以下に幾つかの記述を示しながら、変化する社会における、団地の居住者の暮らしの諸側面の変遷をみることにする。

1) **利便性**；昭和30年代後半に造られた古い公団住宅の団地は、「合理的に造られている」反面で、さまざまな「不自由」も少なくなかった。「(団地内の店しかなくて)品薄」と嘆いていた人たちであるが、やがて「周囲の宅地化が進み」、「初めは不便だったがだんだん便利になって」「買物を楽しむ」ようになる。保育園や学童保育など「すべて手作り」の運動も成果を上げる。

「公園が近く目も届くし、子供が楽しく遊んだ」小公園(Play lot)をはじめ、遊歩道・広場で「子供は伸び伸び遊べた」のは、公団の団地の特徴である。

共稼ぎの奥さんが「足立区に一室借り」の通勤・住宅事情も。

2) **環境**；「緑がたっぷりの」団地の環境は、時間の経過の中でますます豊かになり、「ツバキの大木」や「ビワの古木」など、特別の場所に伴う記憶なども育っていった。「花や小鳥の囀りを楽しむ」団地である。また犬猫禁止などの制約があっても、「飼っていた」人の思いがある反面で、「(落とし物に)困っている」人の思いもある。生き物の環境のほか、「近所の音」や「産業道路ができてその騒音」など、人の発する音に悩む声もある。また「空き家が増えて、手入れの良くない庭にノラが住

みついて」困るという声もあった。周囲が便利になるにつれて、「子供が畑やたんぼで泥んこ遊び」ができた自然の環境や、「セリを摘んだり」「魚を釣ったり」の、大人のふるさとの記憶に繋がる「団地の子供たちのふるさと」も、次第に失われていく。

3) **交際**；厳しい住宅難の時代に、漸く子供を育てる住まいを見つけた人たちは、団地で「子育てを通して同じような仲間に出会った」ことが、それからの近隣のお付き合いの出発点となる。「いろいろな人がいて」「お年寄りとも話が弾んで」「子供も優しくなれる人間関係」が育っていった。「団地の外にも交流が広がり」「サークル活動」に精を出す人がいる一方で、「自治会が作られ」「団地の祭りなどの行事に参加」する人も少なくなかった。「団地を出ていった人たちのお付き合いも、引き続いている」ということもあるけれども、建替のために出て行くことになった人たちの、「その後の様子を心配」する声や、空き家募集停止や仮移転のために「空き家が増えて寂しくなった」という声もある。

4) **住宅**；住まいの狭さについては「7人で暮らしていたんだと驚く」、「(外に)1室借りていたこともある」など、さまざまな記述がなされている。特にテラスハウスの団地では「居間で家族団欒」「庭があるので便利」「増築でいくらか解消」などの、余裕がみられる。「(巣立っていった子供の物で)1室いっぱい」というのは、長く過ごしてきた暮らしの記憶の宝庫といえるものであろう。設備について「30年も経てば古くなる」には、使い古した道具への慣れがある。

5) **家族と健康**；「亡くなった家族」や「巣立っていった子供たち」の思い出は、「老夫婦のみ」や「独り暮らし」になり、それはまた、残された「自分の体の不調」に関する不安にも関わる。健康に関しては「澄んだ空気」の環境の記憶や、「健康に過ごした」「家族との楽しかった暮らし」の回想ともなる。また一度は出ていった子供たちが、親の高齢化やその他の事情で「戻ってきている」例もある。30年以上も経つ団地では、さまざまな家族の絆がみられる。

6) **暮らし**；かつて子供が沢山いて賑やかだった団地も、少子高齢の時代に差し掛かっている。これまでの暮らしを「淡々と生きていだけ」と振り返る人もいれば、「(一人暮らしで)制約なし」に「自由自在」に生き、「(さまざまな)趣味」や「日曜大工」に精を出す人もいる。模様替えには制約の多い賃貸住宅にあっても、部屋の中をいじったり、特にテラスハウスでは「庭に池」や「テラス」を造ったり、自律的な暮らしがみられる。



### 5.3 考察として

以上のように個別の断片的な記述から、団地居住者の暮らしの変遷をみた。戦後の社会的変動の中で、公団住宅の居住者もさまざまな影響を受けたに違いない。けれども彼等の暮らしの諸側面に関する、エピソード記憶をみれば、全体としては暮らしの営みの記憶を積み重ねていくことがよくわかる。

各項目毎の特徴を言葉として簡潔にまとめると、およそ次のようにいえる。

- A) 利便性；地域空間の変化と共同化
- B) 環境；暮らしの中の自然の環境
- C) 交際；交際を育む地域社会
- D) 住宅；複雑な生活が単純な空間の中にある
- E) 家族と健康；家族関係の変遷の中に絆がある
- F) 暮らし；自律的な暮らしの積み重ね

## 6. ヒアリング調査の結果

### 6.1 調査の経過

ヒアリングは、1人約1時間程度から、それ以上かけて聴き取り、それを記録したテープから先ずすべて文字に書きとめ、次いで団地及び団地周辺における、生活のエピソード記憶として語られたものを整理した。さらに団地外の暮らし、団地の暮らし、団地のオープンスペース、団地内の人間関係、団地の物的環境、家の中の暮らし、家族の暮らしの特徴などから、住み手の記憶の中の暮らしを、卒直に表現していると思われる短い言葉を選び出した。

その結果を、アンケート調査における6分類の項目に沿って並べ、聴き取る側の印象を含めてみると、以下のようなになる。各ナンバーの次の記載は、団地名、居住年数、回答者の性別と年齢、家族構成を示す。その項目はAは利便性、Bは環境、Cは交際、Dは住宅、Eは家族と健康、Fは暮らしである。

### 6.2 ヒアリングによるエピソード記憶

#### 1) A；利便性

A-1 金町, 41年, 男性76歳, 単身/愛妻と子供たちの膨大な写真を、日曜大工で造った棚に整理する毎日。晩年の愛妻のために設置した、金属製の立派な手摺りも今のところ不要。「階段に手摺り・F」を付ける。「階段の上り降りです腰は丈夫・E」, 「前は駅まで泥んこで長靴で・A」, 「娘が近所に1部屋借りていた・A」, 「ひろひろしていた桜がこんなに育って・B」。

A-2 草加, 40年, 女性52歳, 母+成人した子供/賃貸住宅に住み続けてきた人の中には、女性が外で働くことの例も多かった。だから「母の代わりに子供が家事・E」をする。亡き母と散歩した公園で「樹が水を吸い上げる音を聴いた・B」, 「便利だった店もつぶれて草加は

死んでいる・A」。

A-3 草加, 39年, 男性70歳, 単身/東京で教員をしていた「女房が足立区に1室借り・A」。子供はこちらで鍵っ子だった。

A-4 前原, 39年, 女性70歳, 夫婦/入居当時は自然がいっぱい。PTAや幼児学級で、地域の人とも交流が。子供を連れて「団地周辺の栗拾いワラビ取り・B」に行った場所も、今は宅地化して昔の面影なし。ちっちゃい子供が「安心して遊べる公園が家の周りにあって・A」お茶碗洗いながら目の高さでお花見。

A-5 東綾瀬, 35年, 男性69歳, 夫婦/犬は駄目の看板が出てるけど、「犬猫の価値の無くなる環境・B」は考えられない。この辺では黙認。この犬も隣の犬。もう子供を育てるわけにいかないから「犬猫が要る・B」。「隣の公園で犬に合わせて歩く・A」。

A-6 東綾瀬, 35年, 女性69歳, 夫婦/この家は風通しが良い。移動図書館から借りてきて「玄関でミニ図書館・A」。乳児検診に日赤の医者を呼んだり、「子供を通してのお付き合い・C」。子供が育ってからは、老夫婦の静かな暮らしで「おしゃべりは好きじゃない・F」。

A-7 前原, 27年, 女性66歳, 母+成人した子供/昨年主人を亡くして何も手に付かない。葬儀は団地の集会所でと思っていたが、田舎からの「親族の宿の手配・A」ができず、結局全部まとめて世話してくれる斎場で葬儀をした。

A-8 草加, 21年, 男性55歳, 夫婦/都会の会社勤めを長くやっても、ゆっくりと時間が流れる田舎の暮らしの感覚を忘れない人柄に、隣人からの信頼が寄せられる。「のんびり暮らす田舎育ち・B」。「団地近くの馴染みの店で飲む・A」。

A-9 草加, 21年, 女性54歳, 夫婦+成人した子供/テラスハウスの1室建て増しは、1階の使い勝手を向上させた。「建て増しで老夫婦と娘が住み分け・E」の他に、ベランダにいて「通りがかりの人とおしゃべり・C」, 「鍵無しの便利を享受・C」, 「近くに住む孫2人の幼稚園の送り迎えは自転車で・A」。

#### 2) B；環境

B-1 既出(A-1)

B-2 既出(A-2)

B-3 既出(A-4)

B-4 草加, 39年, 女性65歳, 夫婦+成人した子供/義母を送り、子供が成人して夫婦が高齢化しても、なお共稼ぎを続けているこの事例では、「クーラー無し、たまに団扇で・D」の言葉の中に、40年前と同じ暮らしの流れがある。「苦労なしの子育てだった・E」。「2階から富士が見えた・B」。

B-5 草加, 39年, 女性65歳, 単身/単なる出入口で



しかない空間に、剥き出しの靴入れが置かれている標準設計。その目隠しに、キャスター付きの物入れを置いて玄関らしい室礼。「粗大ごみを生き返らせ・B」たり、「奉仕活動に歩いたりする・C」元気も。「家の中をいろいろいじって・F」暮らすセンス。

B-6 草加, 39年, 女性64歳, 単身/なるべく付き合いはなしで過ごしてきた, 自分勝手な独り暮らし。「樹を茂らせて暑さ対策に・B」。「階段の上がり下りで運動不足解消・E」。アメリカにいる息子が帰っても「嫁は実家に泊めさせる・E」など, ユニークな暮らし方。

B-7 既出 (A-5)

B-8 草加, 35年, 女性64歳, 母+成人した子供/小さい子供が遠出して無鉄砲をしても, 動じなかった肝っ玉母さん。植えた木が近所から苦情の的になっても動じない。「手植えの樹木が大木に育つ・B」。ここが故郷の長男が, 嫁を連れて帰ってきて「団地で遊んだ場所を見せていた・E」。

B-9 草加, 28年, 女性65歳, 夫婦/この団地の特色は, 庭仕事の多いこと。花・野菜・みかん・みょうが。捨てた生ごみの種からメロン・かぼちゃ・冬瓜。主人はごみの片付けを手伝い「庭の作物に手入れ・B」。「カルチャーセンターの友達がお稽古の後で寄る・C」。

B-10 既出 (A-8)

### 3) C ; 交際

C-1 金町, 41年, 女性80歳, 単身/独居老人にとっては「何かあった時には, 外に出れば皆さんと・C」は, 切実な言葉であろう。洗濯機置き場が家の中に無くて, 「庭で洗濯・D」というのも, 以前と変わらない暮らしを続けている人たちにとっては, 当たり前であった。

C-2 金町, 41年, 男性67歳, 夫婦/裸足で地面で何でもする。庭続きに横にどんどん行くことができたから, 近隣とのつながりがある。「地面に足がついていた・C」。

C-3 草加, 39年, 男性81歳, 単身/5人の子と7人で入居。女の子は高校を出たが, 男の子は中学だけで自立。庭なんか無くても「子供はどこでも遊びます・C」。

C-4 草加, 39年, 女性71歳, 夫婦/業者に頼んで, 本箱を造ってもらったという奥さん。「高層と違って低層住宅だから近所に挨拶はする・C」とか「近所がいる頃は鍵を掛けずにいた・C」とか, 万事割り切りが早い。「本以外の物は買わない・D」。

C-5 既出 (B-5)

C-6 草加, 39年, 女性57歳, 夫婦/垣根越しの「おしゃべりは近所中に聞こえる・C」という長屋暮らし派。団地へ嫁にきて, 団地外に所帯を持ったこともある。内外にネットワークを広げる暮らし。そこで「娘も団地近くに嫁いで, 出たり入ったり・C」。

C-7 既出 (A-6)

C-8 既出 (B-9)

C-9 草加, 26年, 女性58歳, 母+成人した子供/粗大ごみをインテリアに使ったり, 古い布で造った袋物を店に出したりの活動家。お菜のやり取りも, 食事の客もこなす。「食事中でも来客に対応・C」。亡くなった主人がテーブルの脚を切って, 床座にしてくれたけれど「本当は椅子座が好き・F」。

C-10 既出 (A-9)

C-11 草加, 19年, 女性45歳, 夫婦/子供は町で会っても見分けがつく。親とも知り合いの輪が増えていく。祭でも町にもぐり込んで御神輿を担ぐ。「地域でPTAや学童保育の活動・C」。

C-12 草加, 19年, 女性49歳, 夫婦+子供2人/子供から個室が欲しいという苦情を言われるのが珍しくない時代が, しばらく続いていた。そのような時代の常識からは, 女子高生と男子中学生を持つ親からの「伸び伸び育てたから狭さは感じない・E」という言葉は新鮮である。「ご近所は良い人ばかり・C」。

### 4) D ; 住宅

D-1 既出 (C-1)

D-2 既出 (C-4)

D-3 草加, 39年, 男性66歳, 夫婦/「可もなく不可もなく・D」を超える住宅の設計は難しい。この家の奥さんは永年の車椅子暮らし。その不自由を支える, 夫の言葉としての重みを感じる。「トイレや風呂場に手摺り・F」。

D-4 既出 (B-4)

D-5 東綾瀬, 25年, 女性56歳, 夫婦/上の子の遠足に行く時, 下の子を預かってくれる友達がいた。「2DKはどっこも同じで隠すことがない・D」, 中がきれいかどうかだけのことで気にしない。「男の子3人の受験の時どうしてたのかなあと, 今思う・E」。

### 5) E ; 家族と健康

E-1 既出 (A-1)

E-2 既出 (A-2)

E-3 草加, 39年, 男性67歳, 夫婦/子供たちに不自由を強いてきたのではない。住む場所をようやく見つけた世代の人たち。その体験を伝えることが親心だが, そこには辛い思いもあったろう。「狭い所でよく辛抱してくれた・E」。

E-4 既出 (B-4)

E-5 既出 (B-6)

E-6 草加, 39年, 女性50歳, 母+成人した子供/96歳の母が老人病院で入院中, 「自宅に帰るのを楽しみに・E」リハビリに励んでいる。

E-7 既出 (B-8)

E-8 既出 (D-5)

E-9 草加, 19年, 女性60歳, 夫婦+成人した子供/  
前の高蔵寺NTは刺激がないし無菌状態, こっちは別世界に見えた。南面がくっついていて, 見られている感じにも慣れて「来住1年で落ち着いて…F」, 「増築で下は夫婦, 上は子供が各部屋に…E」。

E-10 既出 (A-9)

E-11 既出 (C-12)

## 6) F ; 暮らし

F-1 既出 (A-1)

F-2 既出 (D-3)

F-3 既出 (B-5)

F-4 前原, 38年, 男性80歳, 夫婦/建設業に従事。  
この建物の基礎はしっかり出来ていると思った。やっと子供が成長して, 年寄りだけでちょうどよい広さで暮らしてきたのに, 「新しい環境に馴染むのには時間がかかる…F」。

F-5 東綾瀬, 35年, 男性72歳, 単身/病気がちで,  
一日何も喋らないと呆ける。ガラスを壊されて泥棒未遂。  
「1階は冬寒く, 夏は照り返して暑い…F」。

F-6 既出 (A-6)

F-7 既出 (C-9)

F-8 既出 (E-9)

## 6.3 ヒアリング結果の考察

このヒアリングにより, A9, B10, C12, D5, E11, F8の計55の言葉を拾い上げた。その結果を, 6分類の項目に沿ってまとめるとすれば, 次のようになる。

すなわち利便性に関わる項目は, 事柄によってはその団地の内外に共用の空間を確保することにより, 住み手の利便性を図るという有効性を引き出し得る。

環境の点に関しては, 人と自然の共生がいわゆる昨今である。単に人の側の都合からだけでなく, 自然そのものの存在を認める, すなわち自然の多様性を受け入れ, 人の生活に組み入れるという意味が読み取れる。

交際に関しては, 暮らしを家族の中だけで抱えるのではなく, 地域や社会に開くことにより, 緊張から解きほぐされた生活が導き出される。

住宅, すなわち住まいに関するエピソードからは, 現在の商品経済とは異なる, シンプルな暮らし方こそ, 豊かさを感じることが読み取れる。

家族と健康では, 精神的な家族の絆を維持するところに暮らしの安定が築かれ, そこから社会に開かれた家族像が浮かび上がる。

暮らしの項目については, 自律的な暮らしの尊重が, 大切であると読み取れる。

## 7. 調査の結果

### 7.1 結果の確認

公団住宅の4団地の居住者に対して, 生活の各側面についての6分類26項目にわたるアンケート調査によって, 体験に関する印象を5段階選択で引き出した。特に中層の2団地では, 伝統的な町家の空間について, 3分類30項目を5段階選択で聴いたが, これも多くの項目に対して受容的な回答を得た。

以上の調査の過程で, 記憶の内容について自由記述の中には体験からの意見や思い込み, 各種情報による意味記憶なども含んでいたが, それらを除いて断片的ではあるが体験に基づく, エピソード記憶に関する多くの記述が得られた。従って生活用語の各項目は, エピソード記憶の手掛かりとして働いていることになる。

また空間用語の各項目は, 各個人の体験に関わるエピソード記憶の手掛かりとして働いているほか, その媒介によって設計の過程に貢献できるのではあるまいか。この空間項目の調査からは, これからの公的住宅建替計画にあたり, 高層化にこだわらず, 低層住宅の計画も視野に入れ得る可能性が考えられる。

アンケートの結果から選び出した人にヒアリングを実施し, それぞれ団地の歴史や個人の暮らしの経過と, その特徴などを聴いた。その結果, 対象者の話の内容から, 団地で数十年の間, 変わらず維持された暮らしのエピソード記憶とその特徴が, 前章に示したように, 短い言葉によって把握できた。

### 7.2 計画の条件

調査内容を示した5, 6章から, 暮らしの特徴を示す言葉をアンケート項目の6分類に当てはめてみると, そこには暮らしについて空間的, 時間的的方向があるのに気付く。その方向性を示すと次のようになる。A. 利便性; 地域空間の共同化を図る。B. 環境; 暮らしに自然の多様性を組み込む。C. 交際; 暮らしを社会に開く。D. 住宅; シンプルな生活空間をつくる。E. 家族と健康; 人のきずなが家庭をつくる。F. 暮らし; 自律的な暮らしを尊重する。

A~Fの6分類の語句は, 各ヒアリングの中で居住者の意向に沿った, 計画用語に転換できると考えられる。その理由はヒアリングの中で居住者は, 常にすすんで自分の体験したエピソード記憶である大切な過去を語り, それを通して将来の自分の暮らしの計画条件を, 語っていると取れたからである。

暮らしの連続性を大切に作る計画者の立場からは, 一人ひとりのこれまでの暮らしの特徴から, 将来の多様な計画の条件として, ある方向性が把握できる。

ここで示された6分類の生活用語と, 新たに設定された6計画条件は, いずれも居住者たちの記憶を喚起し,

将来にわたって維持することに有効であるという意味で、記憶の手掛かりとして働いたことが示されたのであり、これが一般的にも働くことが期待される。空間についてのアンケートに使われた各項目についても、原体験などに属するエピソード記憶の手掛かりとして有効であり、このような用語が活用できることも分かった。

## 8. 手法へ

### 8.1 エピソード記憶の手掛かり

調査対象の居住者たちの中には、それぞれの思いを自由記述欄や、ヒアリングに託して語った人が少なくなかった。それは団地の暮らしの質の高さ・低さ、すなわち暮らしの器としての団地の評価につながっていた。

それではエピソード記憶の手掛かりとする調査項目については、どのようなことがいえるであろうか。使用した設問が、暮らしの諸側面にわたる必要な項目を、すべて網羅していたか問題であるが、さらにその内容について充実させる必要がある。

### 8.2 建替計画のための手法の効用

高齢化が進んでいる団地の建替計画にあたり、居住者のエピソード記憶を活用する効用は、長い年月の暮らしの連続性を計画条件とすることにある。

アンケートの結果からも、公団住宅団地の屋外の暮らしは、その計画に相応しい水準の高さが、楽しかった記憶の中に反映している例が多い。屋外関連の項目とその回答は、楽しかった記憶の手掛かりになり、そのまま計画に適用される可能性がある。中でも団地内の屋外の環境は、その大筋が建替の後までも変わらず残される可能性があることから、そのまま記憶の手掛かりとして、暮らしに連続性をもたらす素材にできる。

しかし屋外環境の中でも団地周辺の環境については、この間に宅地化が進み、記憶の中のふるさとの変貌は著しい。子供たちが、かつてのエビガニ捕りや、セリ摘みなどの、生活体験無しに育つような、住宅団地の計画を進めることは、社会全体が未知の世界に向かうことに等しいと思われる。公的集合住宅のまとまった規模の建替計画は、自治体と共同で地域の環境整備計画の一環として、進められなければならない根拠のひとつは、そこにある。

一方で、辛かった記憶に関連する項目としては、家の間取り、広さ等があった。この項目の記憶の手掛かりは、一般に建替事業の実施過程で失われることが多いと考えられる。そこで住まいとその周囲に関する、空間用語を含めアンケートの全項目の必要性を確認し、それらの自由記述と共に記憶の手掛かりとする方法を採用したのである。

### 8.3 手法の適用について

公的集合住宅において、長い間同じ住宅に住み続けてきた人たちが、高齢になってから建替に臨む場合に、どのような計画の手法があり得るのかを考えてきた。この調査では公団賃貸住宅を対象にしたが、同手法が公団の分譲住宅や公営住宅にも適用されることも、特に困難ではない。その場合にもこの調査と同様、より良い暮らしをつくってきたという、自負を持つ人たちの協力が得られるかぎり、エピソード記憶から計画の条件とする手法は可能である。この記憶の手掛かりは索引の一部となるものであるといえる。

## 9. 結語

この研究は目的の項でのべたように、集合住宅の建替に際して、そこに永く住み続けた居住者の生活体験の記憶を聴いて、新しい計画に役立つ手法の提案にあった。すでに見たように調査団地の込み合い具合には大きな差がある。一方はテラスハウスの2団地で建て込みが激しく、他方は公園、緑地や起伏があり、敷地に余裕と変化がある。しかしその環境の違いにも関わらず、居住者の暮らしやその記憶に対する反応はほぼ同一であり、ふるさと感に共通性があることをみた。その視点に立ってこの手法の特徴をまとめると、次のようにいえる。

- 1) 戸建住宅の設計手法を、公的賃貸住宅に適用することが可能である。
- 2) 建替にあたり、今までは普遍性がないとして排除された個人の記憶を聴き取り、それを活用して新しい計画に適應することができる。
- 3) この計画手法は、今までの住まいとの連続性を重視するところから、居住者にとっても安心できる建替計画を実現し得る。
- 4) この手法はさらに広い範囲の、集合住宅居住者層に広げ得るばかりでなく、計画への参加拡大の可能性もある。

それぞれのエピソード記憶が、計画の過程に位置づけられると、「意味記憶」として固定化されてきた今までの「型計画」から、脱け出せると思われる。そこでヒアリングによって取り出された記憶の断片をまとめて、計画の条件として生かす操作を「手法」と呼ぶことにしたのである。この手法に普遍性を持たせるためには、さらに現実化への研究が進められなければならない。

### <注>

- 1) 住環境計画編集委員会編「住環境の計画 5. 住環境を整備する」(足達富士夫:町並みのアメニティと個性を育てる), p.94, 彰国社, 1991.9

### <参考文献>

- 1) 中井久夫:アリアドネからの糸, pp.124~5, みすず書房, 1997.8
- 2) 太田信夫編著:エピソード記憶論, pp.1~3, 誠信書房, 1988.5
- 3) 荒川千恵子, 新井英明:公団住宅建替事業に関する一考察, 茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学, 芸術)第47号, pp.63~77, 1998

### <研究協力者>

- 齊藤 理 (株)三沢建築研究所  
木下 龍郎 (株)象地域設計  
江国 智洋 (株)象地域設計  
宮下 智江 (株)象地域設計